令和６年度　国内研修報告

小牧市立桃ヶ丘小学校　　水野　雄太

研修テーマ
　外国語を使って主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成

１　研修のねらい

小学校外国語科の実践を通して，自分の考えや気持ちを表す言葉や表現を獲得したとしても，それをやり取りの中で活用することの難しさが課題として挙げられた。この課題を解決するために，必要な要素を３つに絞り，研修を行った。

１つ目は，幼少期の日本人の子どもに対してどのように働きかけることで外国語を習得させているかを学ぶこと。これについては，ノーボーダーズインターナショナルスクールでの学校見学を通して研修を行った。２つ目は，児童が主体的に取り組もうとする課題に必要なポイントを学ぶこと。これについては，ELEC（一般財団法人英語教育協議会）が主催する講習会を通して研修を行った。３つ目は，「話すこと」の活動を支援するための具体的な方法を学ぶこと。これについては，株式会社リンク・インタラックが主催するセミナーへの参加を通して研修を行った。

以上，授業中の働きかけや授業構成の設定方法。主体的に取り組める課題設定の方法。児童の「話すこと」を支援する具体的な方法。これらを学び，授業づくりに取り入れることで，主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成を目指すことができると考えた。

２　研修報告

1)　授業中の働きかけや授業構成の設定方法

ノーボーダーズインターナショナルスクールにて，教師の働きかけや授業構成の設定方法を学んだ。当日は，年少から年長クラスを参観した。１クラスあたりの人数は，最も少なくて年少クラスの10名程度，多くて年長クラスの30名程度である。下の学年は担任１名の他に２，３名の補助指導員がつき，上の学年は１名の補助指導員が付く。小学生以上は，下校後の習い事として通っている。

日課は，１レッスンを15～20分程度で区切り，Greeting，Sing a song，Dance，Writingなどのように様々な要素に分けて授業を実施していく。すべての授業を外国語のみで指示や支援をし，指導する。

全クラスに共通していたのは,YouTubeの動画を活用していることである。歌いながら身振り手振りを加えたり，みんなで輪になったり，ゆっくり歩いたりするなど，動画に合わせて常に動作化させていた。歌で使われている単語が動作と一致することで，語彙の習得を促していると考えられる。

また，指示する際の担任の一言も分かりやすかった（表１）。

指　　示	意　　味	使える場面
T「Eye's on me!」 S「Eye's on you!」	わたしを見て！ 見てますよ！	注目させたいとき。Teacherの声かけに対してStudentsが返事するまでセット。
(Please)Clean up.	机の上をきれいにしましょう。	机の上を片付けさせたいとき。
(Please)Line up.	並びましょう。	整列させたいとき。
Standing nicely. Sitting nicely.	立ち方上手だよ。 座り方上手だよ。	よい姿勢を褒めたいとき。
Nice try. Good job. Good challenge.	よくがんばったね。	子どものがんばりを褒めたいとき。

【表１　多用されていた表現】

聞き取ることができた表現は以上だが,他にも多くのコミュニケーションがあった。「Nice try.」等の表現は多用され，マイナスな行動を指摘するよりも，前向きな声かけに努めていることが分かる。外国語を使って表現しようとする園児の姿を後押しする意図を感じる。決して難しい単語は使われておらず，小学校の授業でも活用できそうなものばかりであった。

学校見学後，本研修の窓口となる担当者と話をする時間をいただき，幼少期の日本人の子どもが外国語を習得するにあたって有効と思われる働きかけや，日ごろから心がけていることを伺った。日本の小学校と大きく異なっていたのは，Phonicsの学習だと感じた。Ａ，Ｂ，Ｃ…といったアルファベットを「エー，ビー，シー」と読むのではなく，「ア，ブ，ク」と音として読む指導方法である。こうすることで，外国語特有の口形や発音を身に着けさせ，はじめて出会う単語を，意味は分からないにしてもすらすらと読む力をつけさせられる。年少クラスから，Phonicsの学習を通してアルファベットの読み方を学んでおり，Writingの学習でも，音で読ませていた。私が園児のノートに丸付けをする際，Ｇを「ジー」と読んだとき，担任から「グ，と読んであげて」と注意されたほど，徹底されていた。これらはすべてカリキュラムに組み込まれている。

また，１レッスンの授業構成も興味深い。１レッスンが15～20分程度で区

切られていることは前述の通りだが,そこからさらにセクションが分かれていた。例を挙げると，以下のようになる（表２）。

Ｓ１	色の語彙を学習する。
Ｓ２	食べ物の語彙を学習する。
Ｓ３	色に関するアクティビティを行う。
Ｓ４	食べ物に関するアクティビティを行う。

【表２　１レッスンの授業構成】

このように，１つの事柄を学習させ続けるのではなく，複数の事柄を交互に学習させている。ポイントは，Ｓ２で他の事柄に触れ，Ｓ１で学習したことを忘れさせる。そして，Ｓ３で再び取り上げることで，思い起こす力やひらめく力をつけるのだという。これが知識の定着につながる。言葉を導き出し、使いこなす素地が養われる。

2)　児童が主体的に取り組もうとする課題づくりのポイント

ELEC（一般財団法人英語教育協議会）が主催する講習会にて，課題づくりのポイントを学んだ。このポイントは外国語科以外の教科にも応用が効くと考えられる。

講習会では「日本の文化を紹介しよう」というトピックを用いて説明された。以下のＡパターンは，教科書で扱われるものをそのまま使った課題である。Ｂパターンは講師が実践した際の課題である（表３）。

A　教科書の設定した課題	
指示および活動	予想される児童の反応
日本の文化を外国人に紹介しましょう。写真やイラストを用いて，くわしく説明する文を考えましょう。	・四季や富士山などの自然 ・金閣，銀閣などの遺構 ・寿司，和菓子などの食文化

B　講師の設定した課題	
指示および活動	実際の反応
①　あなたはこれから，オーストラリアでホームステイをします。そこで，日本らしいお土産を持っていこうと思います。あなたは何を持っていき，どのように紹介しますか。	・地方の特産品やお菓子 ・折り紙やけん玉などのおもちゃ ・鉛筆やノートなどの文房具
②　ただし，４人家族です。（父・母・兄14歳，妹10歳）日本からの受け入	・100円均一ショップのアイデア商品

れ経験は10回あります。家族全員が日本の文化にたいへん関心をもっています。紹介するものはスーツケースに入る大きさとします。	・「橋」「箸」と書かれたＴシャツ２枚セット ・人気のキャラクターが描かれたタオル

【表３　課題の比較】

Ａパターンは，指示が抽象的なため，おそらく児童も抽象的なものを思い描くと思われる。また，日本の文化と言っても幅が広すぎるため，１つのものを決定するのに時間がかかる。さらに，「何のために」という視点がないため，課題をやらされている感が出てしまう。

一方，Ｂパターンは明確な目的が示されている。お土産という指示も候補を絞りやすくする一助となっている。そのため，児童の反応もＡパターンよりも具体性が増している。注目したいのは指示が２段階になっていることである。②のような細かい場面設定を後から追加することで，①で思い描いたものから，さらに具体化した相応しいものを選び抜いたり，オリジナリティのあるものを選定したりできるようになっている。100から１を選ぶ作業は大人でも難しい。しかし，100から５を選び，さらに５から１を選ぶという過程を経ることで自己決定しやすくなることをこの２段階の指示は示している。この実践で示された課題づくりのポイントについて，講師は以下のようにまとめている（表４）。

①　考えるための情報，知識，経験があること。
②　大枠（場面，相手，目的，条件）があり，その中で自由に思考できること。
③　児童を伸ばすための教師・生徒間のインタラクションがあること
④　少し負荷のある思考を促すこと
⑤　違い（情報，意見，根拠，価値観，創造，想像，経験値）を，教師も児童も受容する文化が教室にあること

【表４　児童が主体的に取り組もうとする課題づくりのポイント】

ＡパターンとＢパターンの課題の違いを経験したことで，これらのポイントはたいへんよく理解できた。動画で見た実際の授業の様子は，児童が手作りのイラストを持ち，すべて外国語でお土産の詳細や特徴，使い方など，身振り手振りを用いて紹介していた。聴く側の児童も，発表者の紹介に対して，外国語で相槌を打ったり，面白いところは笑ったりしながら，オリジナリティ溢れる仲間のアイデアを受け入れていた。違いを受け入れてくれる安心感が，自分のアイデアを紹介したいという話す意欲につながり，他のみんなはどのようなお土産を思いついたのかという聴く意欲にも

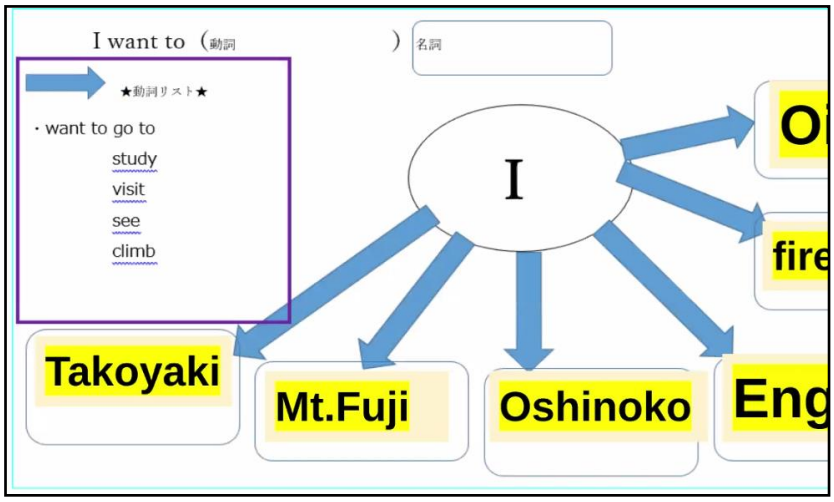
つながる。これらが調和することで，児童が主体的に取り組もうとする課題づくりが実現できる。

3)　児童の「話すこと」を支援する具体的な方法

株式会社リンク・インタラックが主催するセミナーを通して，「話したいけど話せない」という児童を支援する具体的な方法を学んだ。

「ALTとのティームティーチング（以下，TT）の質を高め，思考ツールを取り入れた授業改善」というテーマで，東京都町田市立金井中学校との共同研究が紹介された。当初，「話すこと」の視点において，「生徒たちは大きな声で発表ができ，積極性もある。しかし，残念ながら話されている内容は薄く，話題を広げることができていない」という実態分析がなされた。学年は異なるが，私の研究論文で挙げた「自分の考えや気持ちを表す言葉や表現を獲得したとしても，それをやり取りの中で活用することは難しい」という課題に通ずる部分がある。これを改善するために行われた実践が「ALTとのTT」と「思考ツール」である。

先に思考ツールについて言及する。講義では主に２つの思考ツールが示された。１つ目はマンダラートである（図１）。

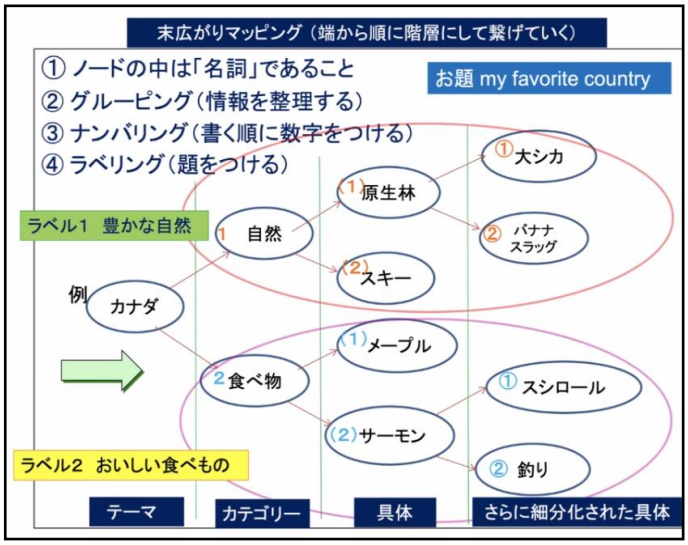


中嶋洋一「ALTとのTTを質的にどのように高めていけるのか
～町田市共同研究！中学校での生徒の主体性を高める指導の在り方について～」より引用

【図１　マンダラート】

これは，テーマを中心にして自分の考えや意見をその周囲に書き加え，思考を整理するものである。これを作成することで，自分の考えや意見を明確にすることができる。このメモを手元で見ながら，ペアでSmall talkやDemonstrationなどに臨ませる。話す際，文法は正確である必要はなく，知っている単語を断片的にでも伝えようとすることが大切である。自分の考えや意見が明確になっていることが，児童の話そうとする意欲を支える。

２つ目は，「末広がりマッピング」である（図２）。



中嶋洋一「ALTとのTTを質的にどのように高めていけるのか
～町田市共同研究！中学校での生徒の主体性を高める指導の在り方について～」より引用

【図２　末広がりマッピング】

これは，テーマに関連する事柄を順序立てて書き加え，話題を広げたり深めたりする際の思考を促すものである。自分が話し手の場合は，「テーマについて途中で途切れずに会話を続けることや，順序立てて説明することができるようになった」。聞き手の場合は，「関連する事柄について理解を示したり，質問したりすることができるようになった」と，生徒からのフィードバックでそれぞれ明らかになったという。これらは，テーマについて，マンダラートで思考を整理し，マッピングで話の順序立てをするというように使い分けて取り入れることが望ましい。

次に，ALTとのTTについて言及する。TTでは，ALTの専門性を活用し，ALTとのやり取りを通して，「話すこと」「聞くこと」の技能や表現を学ぶことが期待されている。実践の手順としては，以下の通りである（表５）。

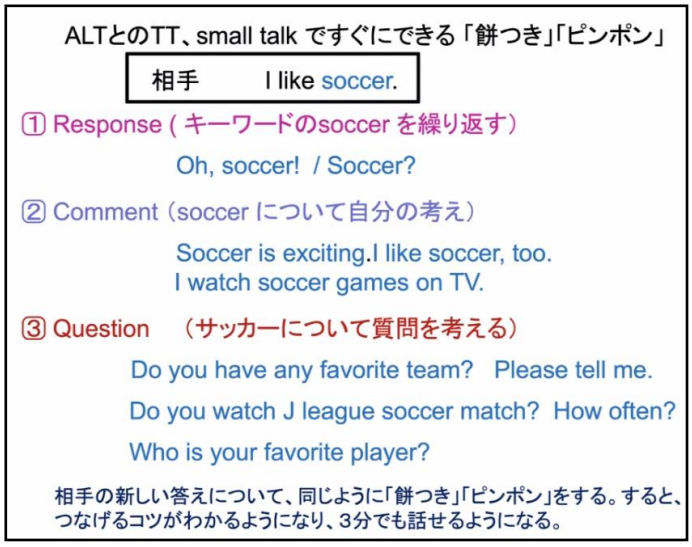
主な活動	備考
①　テーマについて，自分の意見や考えを３つ以上のワードでマンダラートに書き出す。	日本語で書いてもよいが，ALTに尋ねたり，タブレットで調べたりできるとよい。
②　マンダラートをもとに，マッピングで簡単なスピーチの原稿を作り，ペア活動を行う。	事柄を関連させるトレーニングになる。文法は正確でなくてもよい。
③　代表児童を指名し，スピーチをさせる。ALTはスピーチに関連した	ALTの相槌の仕方や，深掘りする質問の仕方をモデルにする。

相槌や質問をする。	
④　ペアを変えて，もう１度スピーチを行う。	ALTのモデルを参考に，相槌や質問をする。

【表５　思考ツールを用いて，ALTとのやり取りをモデルにする活動】

相手の話したことに対して，どのように反応すればよいかをALTがモデルとして示す。それを受けて，再び児童同士でスピーチのやり取りを行う。このようにして，思考ツールを用いて自分の意見や考えを整理・順序立てながら，やり取りに必要な表現や話題の広げ方・深め方を学んでいく。

また，「餅つき」「ピンポン」と題して，やり取りのモデルが示された（図３）。



中嶋洋一「ALTとのTTを質的にどのように高めていけるのか
～町田市共同研究！中学校での生徒の主体性を高める指導の在り方について～」より引用

【　図３　「餅つき」「ピンポン」　】

「餅つき」は，①や②のリアクションを指す。相手の発言を繰り返したり，自分の考えを伝えたりする反応のことである。「ピンポン」は③の質問を指す。相手の話を深掘りする質問のことである。この①～③のパターンを日常のSmall talkで続けることで，やり取りの続け方が分かり，日常会話が成り立つのだという。

３　研修での学びと今後に向けて

私の研究論文で挙げた，「自分の考えや気持ちを表す言葉や表現を用いて，やり取りをすることは難しい」という課題の解決方法を３つの視点から学ぶことができた。特に，ALTと連携を取り，その高い専門性を生かすことはすぐにでも取り入れられることである。私はこれまで，ネイティブの発音を聴い

たり，正しい表現を尋ねたり，児童のパフォーマンステストの対象としたりすることくらいでしかALTの活用を考えてこなかった。外国語を使ったやり取りに関しては，ALT以上の教材はないのだから，連携・活用しない手はない。

３つの視点の要素を授業に取り入れ，継続して行うことができれば，主体的にコミュニケーションを図ろうとする児童の育成が実現できると思われる。しかし，定められた授業時数の中で実践できることには限りがある。各研修で学んだ要素を，１学期単位，１年単位の長い目でカリキュラム編成することが必要であると考える。そして，日ごろからALTと授業づくり，課題づくりについて話し合うことや児童のゴールを設定することは必要不可欠な部分となると考える。取り入れられることから始めることで，日ごろの授業をよりよいものへ改善していきたい。

[引用文献]
宮崎貴弘「生徒から学ぶ、言語活動で表現力を育てる教師の役割」の研修資料